

## 鳥居龍蔵による慶尚北道・慶尚南道調査関連資料について

吉井 秀夫

### はじめに

1910年代に、鳥居龍蔵が朝鮮半島各地でおこなった人類学的・考古学的調査は、他地域の調査にくらべてその実態に不明な点が多い。それはこれまでも指摘されてきたように、朝鮮古蹟調査をめぐる研究者間の葛藤により、正式な調査報告がほとんど刊行されなかったことに大きな原因があると思われる。そのため、調査回数・調査期間・調査経路、といった基本的な情報でさえ、鳥居の自伝をもとに、鳥居自身や関係者による断片的な言及などから得られた情報を加えて推測するしかなかった。

しかし最近になって、朝鮮半島における鳥居龍蔵の調査の実態を明らかにしようとする研究が進められるようになった。まず日本側では、鳥居龍蔵記念博物館の移転・開館事業が進められる中で、新たな視角からの検討がおこなわれてきた。例えば石尾和仁は、鳥居が送った手紙・葉書を活用することによって、調査実施時期を再検討・修正した(石尾 2010)。また吉井は、写真技師として朝鮮総督府古蹟調査事業に深く関わった澤俊一の業績を紹介する中で、鳥居による第2回調査に同行して以後、鳥居の調査のみならず、朝鮮古蹟調査事業に関するさまざまな調査に澤が同行し、膨大な写真資料を残したことを明らかにした(吉井 2008)。

一方、大韓民国(以下、「韓国」と表記)においては、鳥居に同行した澤俊一が撮影した写真のガラス乾板が国立中央博物館に所蔵されており、公開された目録(国立中央博物館 1997)により、その概要を知ることができるようになった。それらの写真のうち、固城松鶴洞古墳(姜 1987)、慶州月城(国立慶州文化財研究所編 2010)、大邱達城(大邱文化芸術会館 2007)などの調査に関するものについては、遺跡の再調査などの機会に紹介されてきた。また、国立中央博物館に所蔵されている文献「朝鮮ニ於ケル博物館事業ト古蹟調査事業史」(国立中央博物館 2009, pp.46-47)により、鳥居による調査回数・日程が、当時どのように認識されていたかが明らかになった。さらに、鳥居が朝鮮総督府に提出した復命書や関連する文献を利用することにより、当時の調査の実態をさらに具体的に検討する研究も進められている(咸 2013)。

このように、日本・韓国における研究を通して、鳥居龍蔵の朝鮮古蹟調査の実態は明らかになりつつある。しかし、鳥居による朝鮮半島古蹟調査の実態を明らかにしようとする研究を阻害する大きな要因の1つとして、当時の調査に関連する資料が日韓両国に分散しており、その所蔵の実態でさえははっきりしていない点があげられる。特に鳥居龍蔵記念博物館に関連資料がどのように収蔵されているのかは、韓国の研究者にとって関心の的であった。

本稿は、以上のような研究状況を踏まえ、鳥居龍蔵記念博物館が所蔵する、鳥居龍蔵による慶尚北道・慶尚南道地域での調査に関連する資料を紹介し、その歴史的意義について基本的な検討を加えようとするものである。具体的には、今回、筆者が本稿を執筆することになった経緯を紹介した上で、調査順に関連資料を紹介する。そして最後にその歴史的意義について述べることとしたい。

### 1 資料紹介までの経緯

筆者が、今回紹介する資料の存在を知ったのは、2011年2月に、新しい展示を見学するために鳥居龍蔵記念博物館を訪問した際である。展示室の背景装飾として、今回紹介する図面の一部が用いられていたのをみた筆者は、それらが従来知られていないものであることに気がついた。そこで同年9月に

改めて、関連する図面・地図を閲覧する機会をえて、その重要性を確認した。その時の調査成果は、2012年3月4日に開催されたシンポジウム「鳥居龍蔵の足跡を考える－台湾・中国・朝鮮半島－」において、「鳥居龍蔵の朝鮮半島調査－鳥居龍蔵記念博物館所蔵資料の検討を中心に－」という題目で報告をおこなった。

その後、鳥居が残した資料の学術的価値を検討するために、2012年3月20日から24日まで韓国を訪問し、鳥居が調査した遺跡の現地踏査をおこなった。まず20日・21日は、金海貝塚および金海市内の支石墓を見学した。22日には大邱達城を踏査し、23日には、慶州月城を訪れた。

この調査の際に、国立大邱博物館の咸舜燮館長から、国立中央博物館に1914年度および1917年度調査時の写真および復命書などがあり、それを元に大邱達城および慶州月城での調査状況について検討を進めているとの教示をえた。そして、鳥居龍蔵記念博物館所蔵資料について意見交換した結果、日韓の資料を総合することによって、調査の全貌がほぼ明らかになるだろうということで意見が一致した。その後、咸氏は2012年4月に開催された嶺南考古学会第21回学術発表会「日帝強占期嶺南地域の考古学調査とその性格」において、「日帝強占期鳥居龍蔵の慶州月城及び大邱達城調査について」の題目で報告をおこない、それを元に書かれた論文は、2013年に刊行された単行本『日帝強占期嶺南地域の古蹟調査』に収録された。その内容については、本報告で翻訳をおこなったのでご参照願いたい。

2014年に入り、植民地時代における大邱達城の調査成果の再検討をすすめていた国立大邱博物館と、金海貝塚の調査成果の再検討をすすめていた国立金海博物館から、報告書に鳥居龍蔵記念博物館所蔵資料を掲載したいとの打診が吉井にあり、その旨を鳥居龍蔵記念博物館にお伝えして調整をおこなった。その結果、今回紹介する資料の写真が、鳥居龍蔵記念博物館から両博物館に提供されることになった。2014年3月18日には、咸舜燮氏が鳥居龍蔵記念博物館を訪れて関連資料を実際に見学し、意見交換をおこなった。この調査には大韓民国大邱MBC放送局の取材クルーが同行し、資料調査の様子は、同年8月8日に大邱MBCの番組「達城」で放映された。金海貝塚関連資料については、京都大学考古学研究室および東洋文庫所蔵資料と共に、総合報告書で筆者が解題をおこなった（吉井 2014）。また、大邱達城に関連する資料については、国立大邱博物館から刊行された報告書（国立大邱博物館 2014）で紹介された。

以上のように、鳥居龍蔵による慶尚北道・慶尚南道での調査関連資料は、鳥居龍蔵記念博物館のご理解・ご協力および、韓国の関係諸機関のご協力によって、その歴史的意義が明らかになると共に、その資料を韓国に紹介することが可能となった。そして、本稿を通して日本の研究者に対してもその概要を紹介することができることを、心から感謝したい。

## 2 鳥居龍蔵記念博物館所蔵慶尚北道関連地図について

まず、鳥居龍蔵記念博物館に所蔵されている、3点の慶尚北道関連地図についての紹介と検討をおこなう。本地図は、慶尚北道一帯を調査する際に、鳥居が入手・利用したと考えられる。各地図の概要は以下の通りである。

### (1) 地図の概要

#### 1) 「慶尚北道行通略図」（大正三年三月、縮尺350000分の1）（図1）

1914年1月に改変された慶尚北道の道・郡・面の地名、および境界を表記した地図に、憲兵隊および警察署関連の施設の位置と、それらを結ぶ経路および施設間の距離を記入したものである。大邱憲兵隊本部と慶尚北道警務部の調査により作成されたものであり、一般の人々が入手できる地図ではなかったと思われる。

興味深いのは、この地図の中に、鳥居が通過もしくは調査をおこなったと思われる軍の憲兵分隊・憲兵分遣所・警察署の所在地（それらは各郡もしくは面の中心地であったと思われる）に、青鉛筆で丸印が書かれている点である。これを調査ルートに準じて列記すると、慶州・浦項・清河・盈徳・青松・安東・榮州・豊基・醴泉・尚州・金泉・星州・大邱・高霊である。







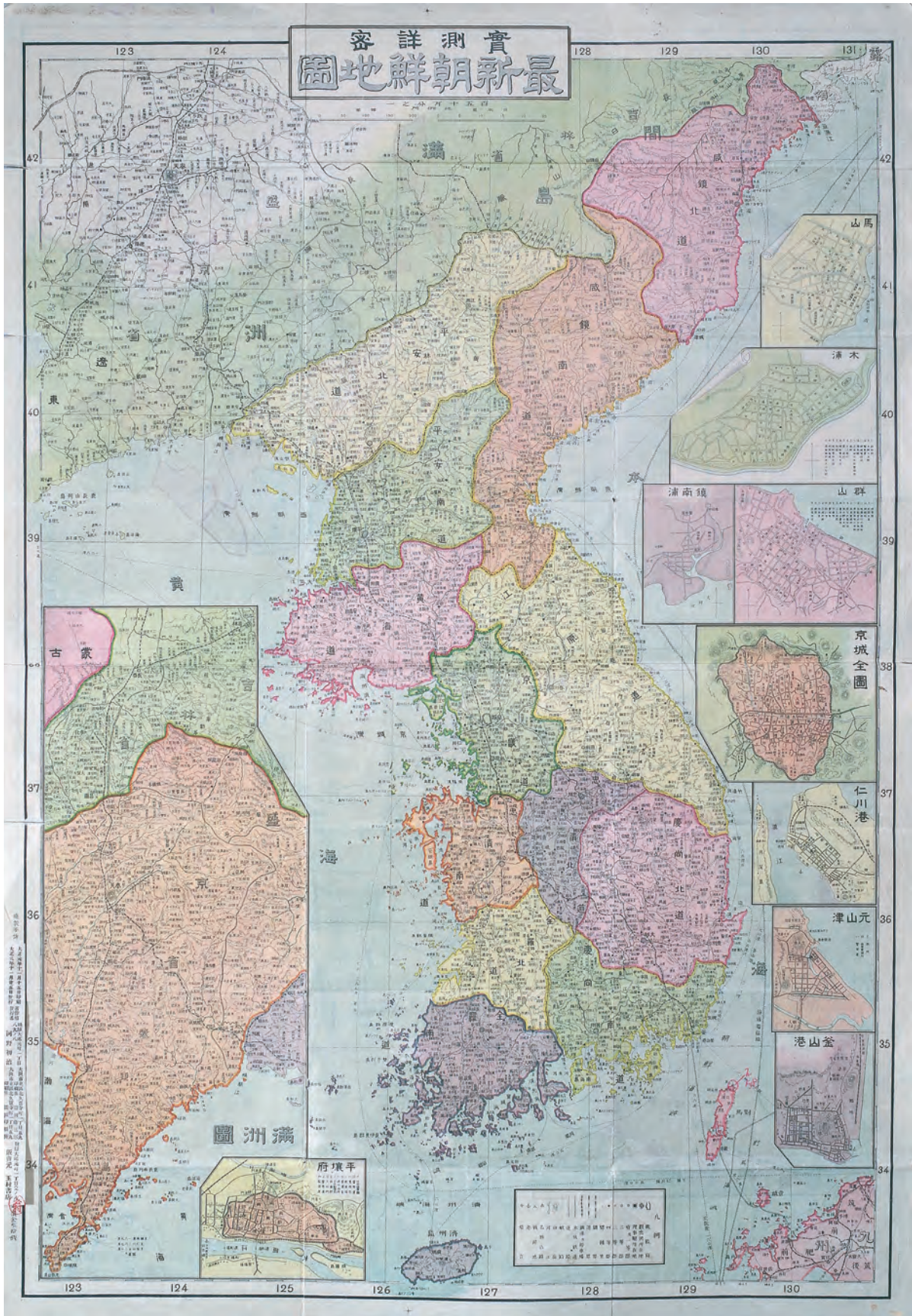


圖2 實測詳密 最新朝鮮地圖



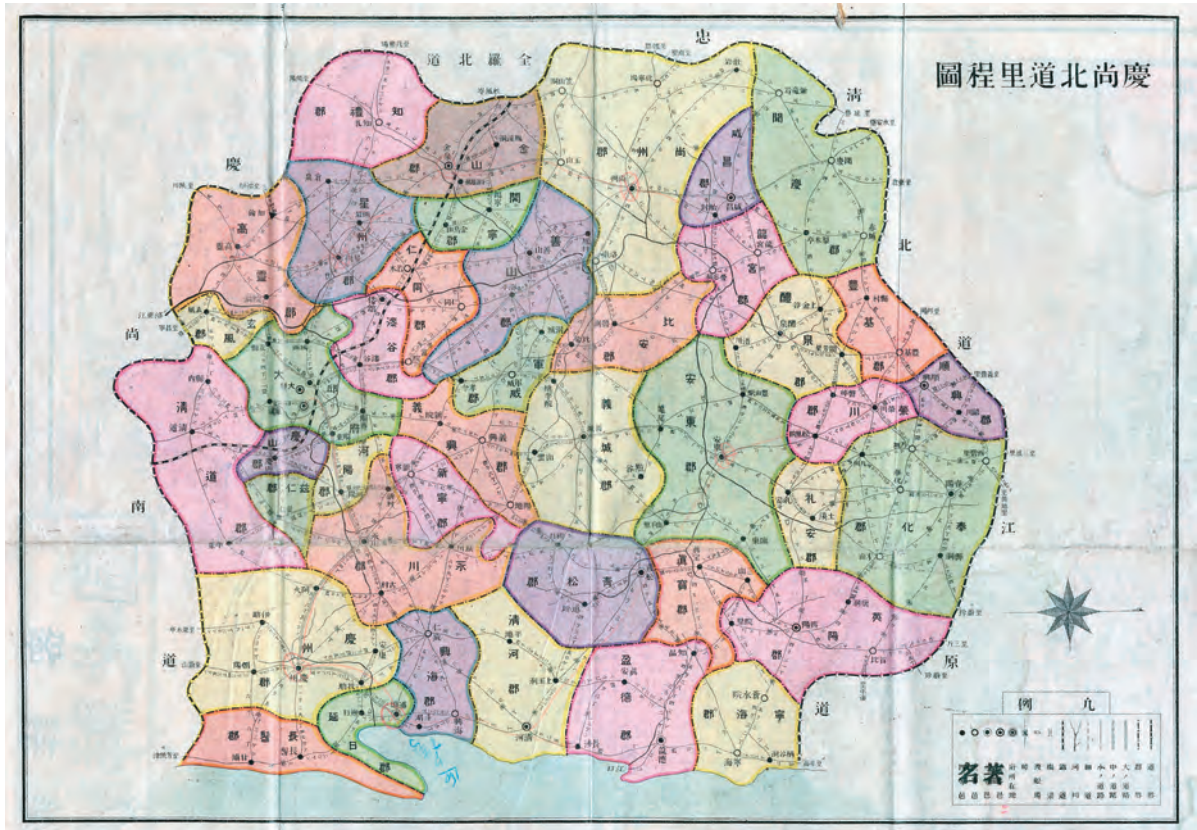


圖 3 慶尚北道里程圖



圖 4 慶州地形圖



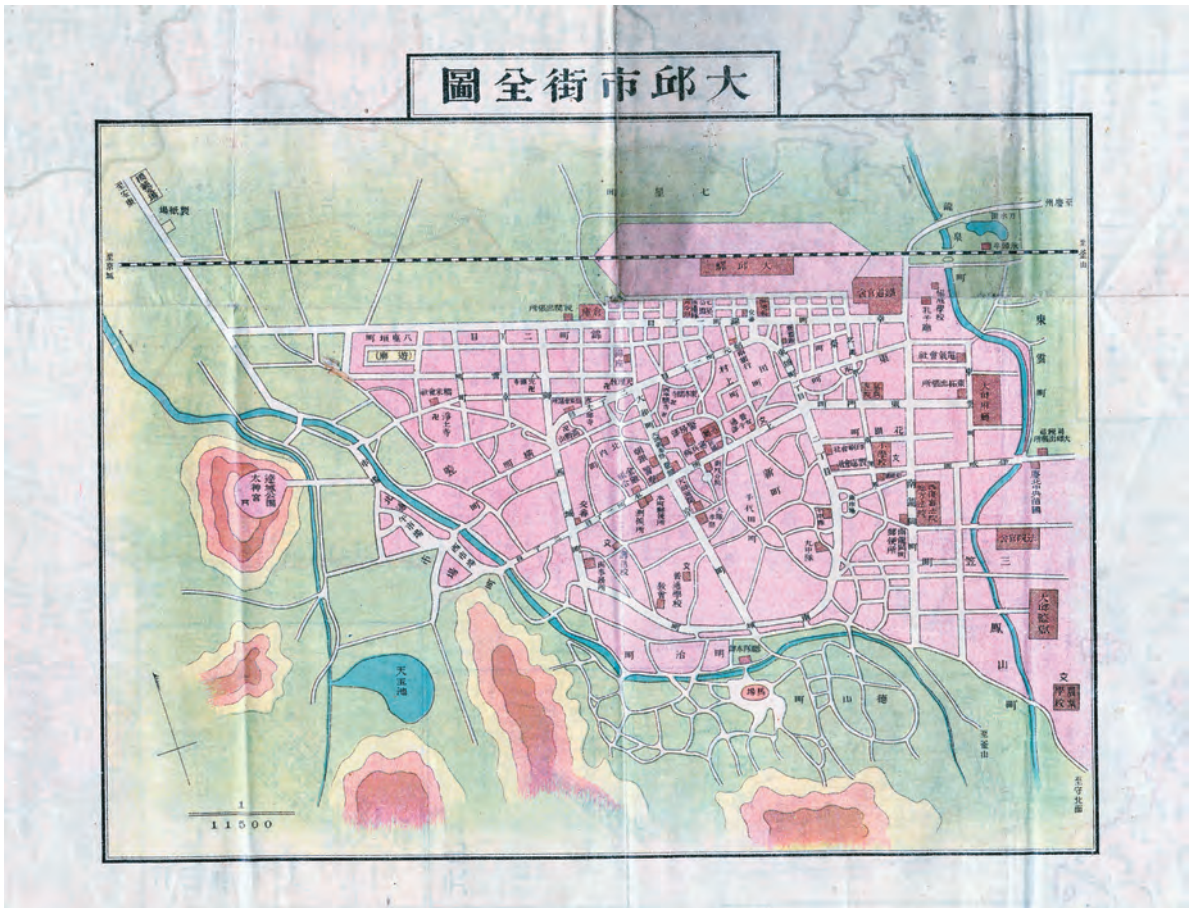


图5 大邱市街全圖



图6 朝鮮大邱明細圖 現在實施中



## 2) 「実測詳密 最新朝鮮地図」(大正元年発行)

表裏2面に4種類の地図が印刷されている。まず表面は、朝鮮半島全体の地図である。さらにその周辺に、右側には上から下に向かって「馬山」・「木浦」・「群山」・「鎮南浦」・「京城全図」・「仁川港」・「元山津」・「釜山港」、左下側には上から下に向かって「満州図」・「平壤府」の地図が配置されている(図2)。朝鮮全図は道ごとに色が塗り分けられ、周囲の地域図も適宜彩色されている。

裏面には、「慶尚北道里程図」(図3)・「大邱市街全図」(図5)・「朝鮮大邱明細図 現在実施中」(図6)の3種類の地図が配されている。「慶尚北道里程図」は、慶尚北道内の郡名および主な邑・面の地名および所在地を示し、各地を結ぶ経路とその距離が記入されている。また、各郡は異なる色で塗られている。本図で示されている郡は、1914年1月に行政区画が整理される以前のものである。注目すべきは、この地図内の複数の地名に赤鉛筆で丸印がつけられ、それらが線で結ばれている点である。その経路は、大邱→(永川経由)→慶州→浦項→(清河・青松経由)→安東→(榮州経由)→豊基→(醴泉経由)→尚州→金泉→明岩→星州→高靈の順である。

「大邱市街全図」は、地図が発行された1912年当時の大邱市内を表したと思われる地形図である。邑城の城壁が撤去されて道路となっていること、大邱駅の南側に格子状の道路がつくられはじめていたこと、達城の中に「太神宮(大邱神社)」が設置されていることなどが読み取れる。一方、「朝鮮大邱明細図 現在実施中」は、一種の都市計画図であると思われる、大邱市内全域に格子状の道路が敷設される予定であったことがわかる。

本地図について興味深いのは、その発行主体および印刷地である。それらの情報源となる奥付は、以下の通りである。

大正元年十一月十五日印刷 大正元年十一月二十五日発行  
 著作権発行者 朝鮮大邱元町一丁目八九ノ八 河野初治  
 印刷者 大阪市東区北久宝寺町一丁目五九 園田藤三郎  
 印刷所 大阪市東区北久宝寺町一丁目五九 園田印刷  
 販売元 朝鮮大邱元町一丁目八九ノ八 玉村書店

この奥付部分には、別紙に印刷されたものが貼り付けられ、下端に「玉村」銘の割印が押されていることから、何らかの修正事項があったものと思われる。この記録により、本地図が1912年に大阪で印刷され、大邱にあった玉村書店が販売したことがわかる。玉村書店は、大邱や慶州の絵葉書を販売したことが知られている。また、1920年に奥田悌が刊行した『新羅旧都慶州誌』の発売元でもある。さらに『毎日申報』には、山之井麟治『鮮普通文官応試提要』が玉村書店から刊行されたことを知らせる記事(1914年5月29日付「新刊紹介」)や、京城日報が主催した京城・大邱の庭球戦を、朝鮮体育協会と共に後援したことがわかる記事(1925年4月23日付「京城対大邱庭球戦／龍攘虎搏の結果／勝利した大邱軍」)が見いだせる。こうしたことから、玉村書店は1910年代から1920年代にかけて、慶尚北道関連の書籍や絵葉書を扱い、地域の文化行事を支援するような書店であったことがわかる。本地図により、玉村書店の開業が1912年までさかのぼることや、書籍や絵葉書のみならず、地図も扱っていたことが明らかになった。

## 3) 「慶州」地形図(縮尺1万分の1)(図4)

慶州の中心地とその周辺を表した地形図で、右上に「朝鮮一万一慶州第一号」、右下に「高程ハ陸地測量部製版五万分一地形図ニ致ス 図式ハ明治四十三年式地形図図式ニ準ス」、左上に「大正二年四月製図全年五月製版」、左下に「慶州守備隊特定目算測図」との注記がなされている。慶州邑城は、城壁が表記されている。邑城南側にも市街地が広がりはじめているものの、金冠塚と思われる古墳の墳丘が表記されている点に興味深い。

この地図が注目されるのは、単純な地形図ではなく、慶州周辺の古蹟の位置と名称を赤字で示している点である。地図の左右に印刷された、古蹟の記号および名称は以下の通りである。

(い) 奉徳寺鐘 (ろ) 鳳凰台 (は) 金氏味鄒王陵 (に) 崇恵殿 (金氏味鄒王, 文武王及敬順王ヲ併セ祭ル) (ほ) 金氏奈勿王陵 (へ) 孔子廟 (と) 鷄林 (ち) 瞻星臺 (り) 石氷庫 (ぬ) 崇信殿 (昔氏脱解王ヲ祭ル) (る) 雁鴨ノ池 (を) 芳篁寺 (わ) 九重ノ塔 (目下三重ノミ存ス) (か) 昔氏脱解王陵 (よ) 瓢庵先生李謁平遺墟 (慶州李ノ太祖ニシテ朴氏以前ノ人ナリ) (た) 石仏像 (一ケノ自然石ニ数多ノ仏像ヲ刻ス) (れ) 柏栗寺 (そ) 金山齊 (金庚信ノ墓守リニシテ書院ヲ為ス) (つ) 新羅太角干金庚信ノ墓 (太角干ハ今ノ内閣総理大臣ニ全シ) (ね) 西岳書院 (金庚信, 薛瞻, 崔致遠ノ三氏ヲ祭り書院ヲナス)

## (2) 地図の使用時期と歴史的意義

以上の3点の地図の性格を知る上で重要なのは、慶尚北道行通略図と慶尚北道里程図に記された、調査地あるいは経由地を記録したと思われる丸印である。鳥居による慶尚北道の調査は、1914年度と1917年度におこなわれている。何れの調査も、大邱から慶州に向かい、慶州調査後は、慶尚北道を反時計回りに調査を進めている。ただ、鬱陵島を訪れたことを示す印が残されていないことや、浦項から安東・榮州方面に向かって以降の詳細な調査経路の比較から、これらの印は、1914年度の調査にかかわるものと考えるのが妥当である。この推測が正しければ、鳥居は、発行されて間もない慶尚北道行通略図と、発行されて2年ほどたった慶尚北道里程図を入手して、調査に活用したと考えられよう。

京都大学考古学研究室に残されている、濱田耕作・梅原末治が1918年秋に星州・高靈・昌寧を調査した時に用いたと思われる地図の中にも、慶尚北道と慶尚南道の郡・面の中心地などを示した2枚の略地図がある。各地図には、調査地の横に、調査にかかわる簡単な情報を記入した紙が添付されている。調査地周辺の地形図とは別にこうした地図が準備されたのは、朝鮮半島の地理に明るくない内地からの研究者が、全体の調査旅程を理解する上の助けになるからだと考えられる。今回紹介した地図も、同様の性格を有していた可能性が考えられよう。

一方、慶州地形図は、朝鮮半島各地で作成が進められていた5万分の1地形図をもとに、慶州の主要な古蹟の位置を示すために製作された特殊地図である。本地図とよく似た性格をもつ地形図としては、英語で古蹟の名称を表記した、1917年陸地測量部発行の2万5千分の1地図が知られている(柏書房1985)。本地図はそれよりもさらに古い時期に、同様の地図が作製されていたことを示している。また『朝鮮古蹟図譜』三(朝鮮総督府編 1916)に掲載された「慶州附近新羅遺跡地図」(955番)や、大正5年測図、大正6年製版の1万分の1慶州地形図(柏書房 1985)なども、比較対象となる地形図である。これらは、基本的な地形などの情報はほぼ一致しているが、収録範囲がややずれていることと、主な古蹟名が直接記入されている点が、今回紹介した地形図と異なる。

また本地図において興味深いのは、古蹟の名称である。例えば、大正6年測図慶州地形図や、各種の概説書では「瓢岩」と呼ばれる古蹟は、「(よ) 瓢庵先生李謁平遺墟 (慶州李ノ太祖ニシテ朴氏以前ノ人ナリ)」と説明されている。同様に後には「掘佛寺四面石佛」と呼ばれる古蹟を、「(た) 石仏像 (一ケノ自然石ニ数多ノ仏像ヲ刻ス)」と説明している。こうした名称は、前述の『朝鮮古蹟図譜』三に掲載された地形図に書き込まれた古蹟の名称ともほぼ同一でもあり、慶州の古蹟に関する初期の認識が反映されているのかもしれない。本地図が刊行された大正2(1913)年は、慶州古蹟保存会が正式に発足した年であることも、慶州が観光地として注目されはじめた初期の状況を考える上で興味深い。本地図が1914年度と1917年度のどちらの調査で使用されたのかを知りうる手がかりは存在しない。ただ、その刊行年度からみて、1914年度の調査時に本地図は入手可能であり、その時に入手・使用した可能性があることを提示しておきたい。

## 3 慶州月城・大邱達城・金海貝塚調査関連図面について

### (1) 鳥居龍蔵の1917年度慶尚北道・慶尚南道調査

次に、慶州月城・大邱達城・金海貝塚で鳥居が発掘調査をおこなった際に作成されたと思われる図



面類を検討したい。ここで紹介する図面は、1917年10月から1918年1月にかけて、慶尚北道・慶尚南道で調査をおこなった際に作成されたものと考えられる。そのルートは、「大正六年度古蹟調査事務概要」(朝鮮総督府 1920)や、国立中央博物館に所蔵されている1917年度調査の復命書<sup>(1)</sup>により、以下のよう<sup>(1)</sup>に復元できる。

10月24日に京城(現在のソウル)を出発した鳥居と澤俊一らは、10月26日から11月13日まで慶州周辺の調査をおこなった。この時に、本稿で紹介する月城の発掘調査をおこなった他、周辺に所在する石器時代の遺跡を踏査した。11月14日に慶州を出発した一行は、浦項を経て、18日から21日まで鬱陵島各地に存在する古墳の調査をおこなった。22日に鬱陵島を出発した一行は、榮州郡(11月28日から12月2日まで調査)と安東(12月4日から6日まで調査)での調査を経て、12月8日から13日まで大邱に滞在した。この時に本稿で紹介する達城の発掘調査をおこない、周辺地域の石器時代遺跡や支石墓も調査した。14日に大邱を出発した一行は、居昌(12月16日から17日まで調査)、陝川(12月19日から20日まで調査)、晋州(12月23日調査)、固城(12月26日から28日まで調査)、統営(12月28日調査)、東萊(12月31日)、密陽(1月2日)で踏査をおこなった。その後、1月5日から12日まで金海で、金海貝塚の発掘調査をおこない、周辺の石器時代の遺跡や支石墓の踏査もおこなった。金海での調査を終えた一行は、1月13日に金海を出発し、14日に京城に帰着した。

咸舜燮氏が指摘するように(咸 2013)、1917年度の調査は、1913年度・1914年度の調査を元に、慶尚北道・慶尚南道各地の石器時代遺跡の実態をより明らかにすることが、目的の1つであったと考えられる。その中でも、慶州月城・大邱達城・金海貝塚の調査は、鳥居にとって、朝鮮半島および日本列島の有史以前を理解するために重要な役割を果たしたと考えられる。以下、調査順に、本調査に関する図面の紹介をおこないたい。

## (2) 慶州月城の発掘調査と関連図面

新羅の王都がおかれていた慶州には、三国時代から統一新羅時代に至るまでの、さまざまな遺跡が濃密に分布している。中でも現在の慶州市街地南側一帯に広がる三国時代の高塚古墳群は、発掘により金冠をはじめとする量・質共に豊かな副葬品が出土したことで知られている。また、円形もしくは双円形の墳丘をもつ大型古墳が分布する姿は、慶州を代表する風景である。この古墳群の南側を流れる南川にそって、東西に広がる半月状の丘陵を利用してつくられた土城が、月城である。城内一帯には、瓦片や礎石があちこちに分布しており、最近のレーザー探査により、城内の各地に残る数多くの礎石建物跡の状況が明らかにされた。

鳥居が目じたのは、月城の城壁の下層から出土する遺物であった。この時の出土遺物については、有光教一により紹介がなされたことがある(有光 1959)。その論文では、1915年春に発掘調査がなされたとされているが、国立中央博物館に所蔵されている諸文献を検討した結果、1914年度と1917年度の2度にわたって調査がおこなわれたことが明らかになった(咸 2013)。しかし、調査の実情を知る手がかりは、鳥居による断片的な言及と、調査中の写真に限られてきた。鳥居龍蔵記念博物館に所蔵される、1917年度の発掘調査に関連する2枚の図面は、当時の調査状況を知る上での重要な手がかりとなる資料である。その概要は以下の通りである。

### 1) 「半月城壁下実測図」(縮尺6000分の1)(図7)

画用紙に月城とその周辺遺跡の平面図を描いた図である。城壁部分の範囲を描き、城壁の高低を等高線で表現する。城壁上の各所に数字が書き込まれている。現在の地形図の標高と比較した結果、これらの数字は、城内のある地点を基準とした相対的な高さを尺単位で表したのではないと思われる。こうした推測が正しいのであれば、等高線は10尺間隔で引かれた可能性が高い。道路は茶色に彩色されており、城内外に残る施設も書き込まれている。また、南川および雁鴨池は水色で彩色された。月城南西側に位置する門址の一角には、小さな四角形が書き込まれており、これが1917年度調査の調査区の位置を表していると考えられる。



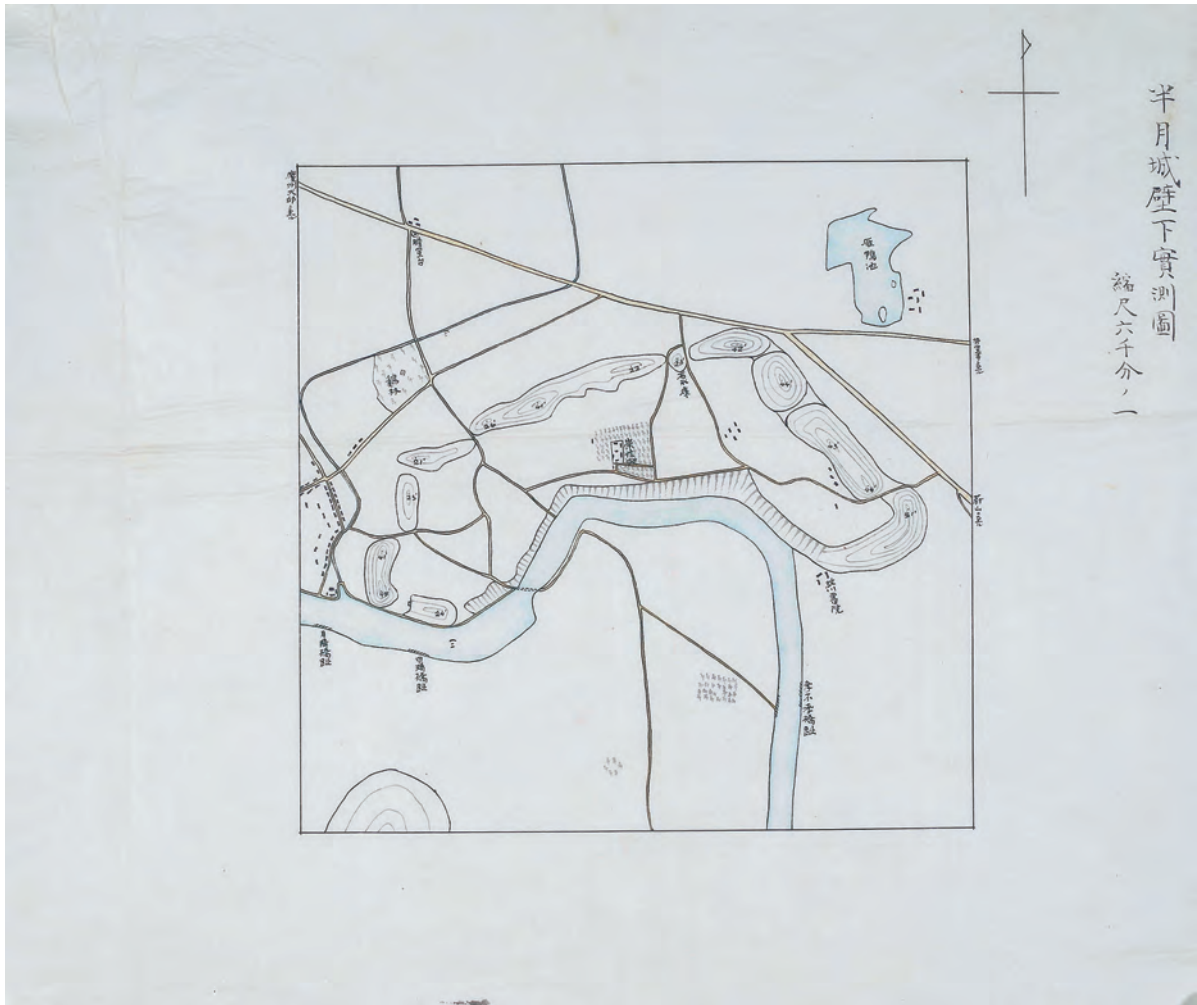


图7 半月城壁下実測図

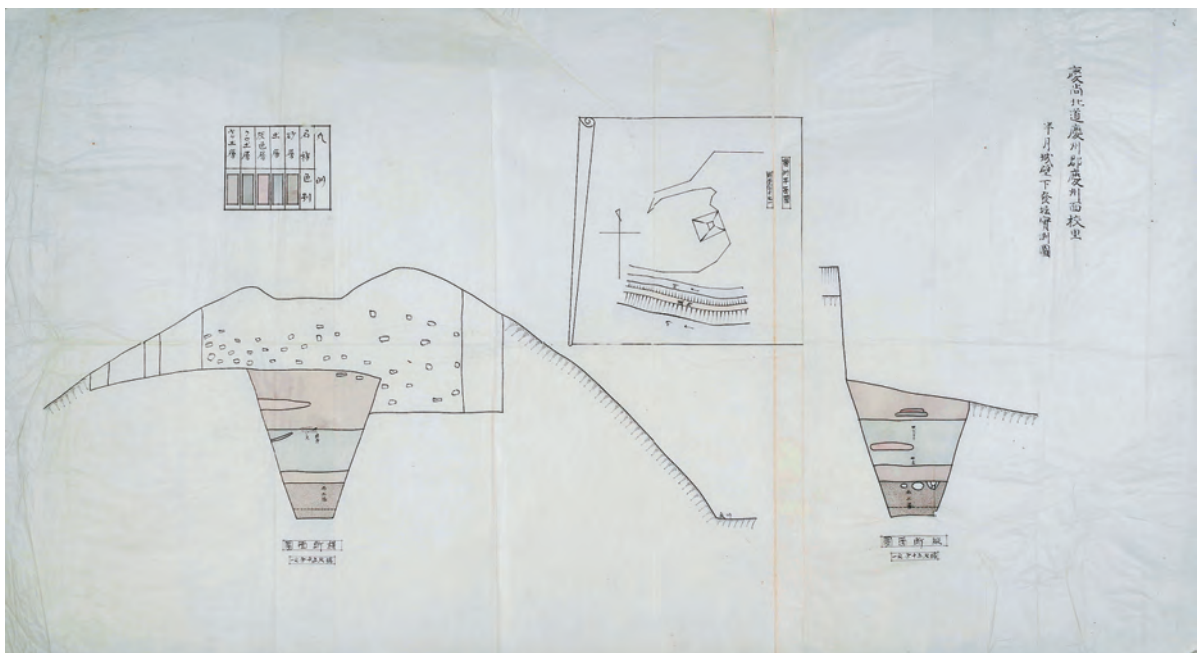


图8 慶尚北道慶州郡慶州面校里 半月城壁下発掘実測図



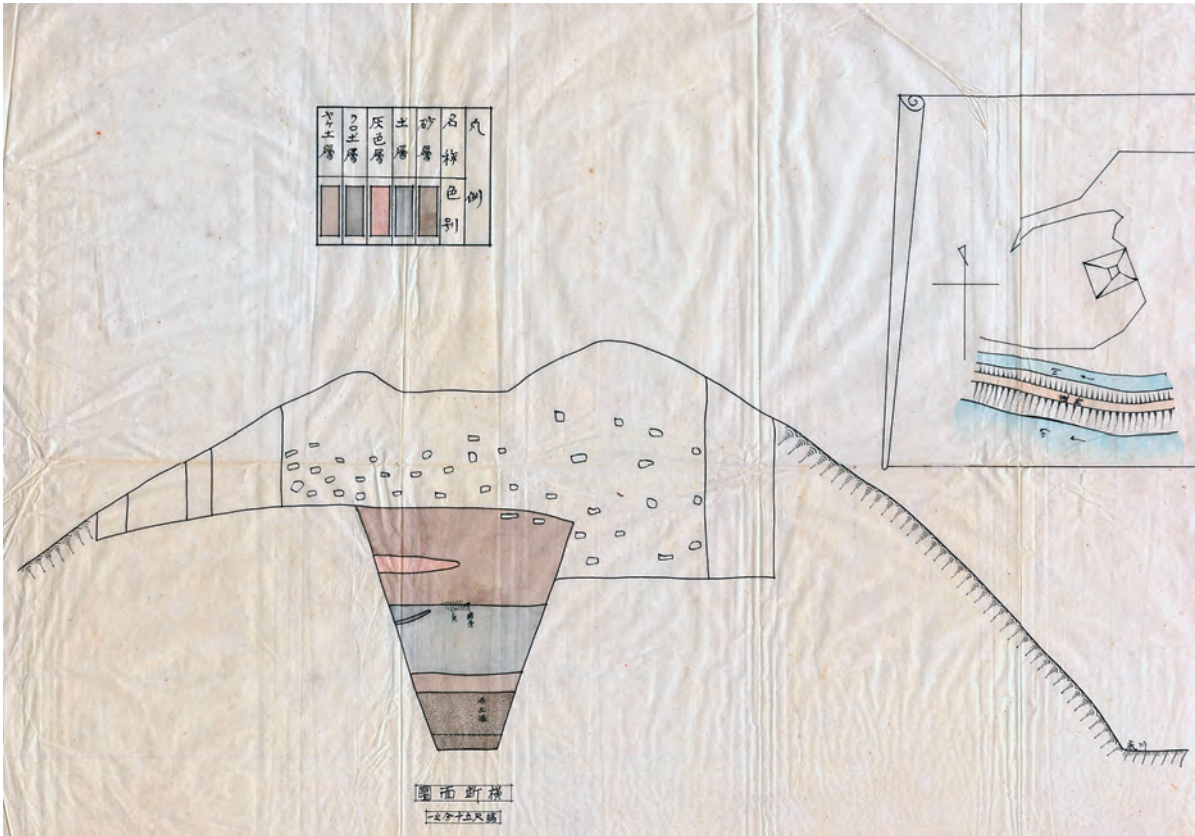


图9 半月城調査区横断面図

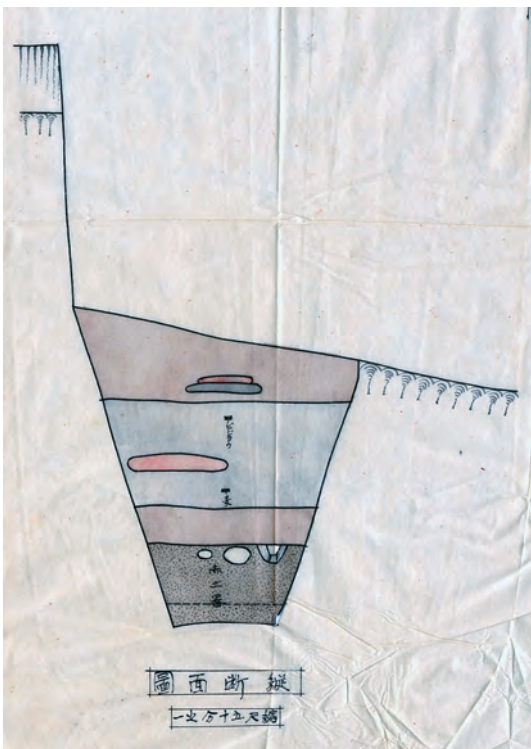


图10 半月城調査区縦断面図

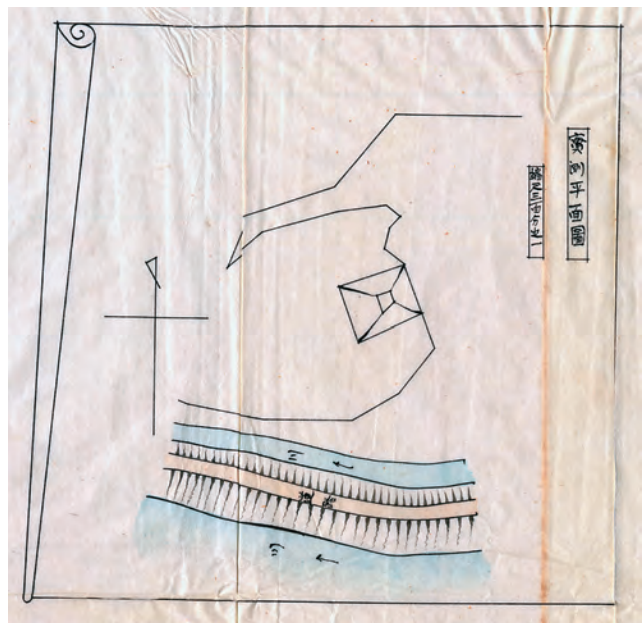


图11 半月城調査区実測平面図





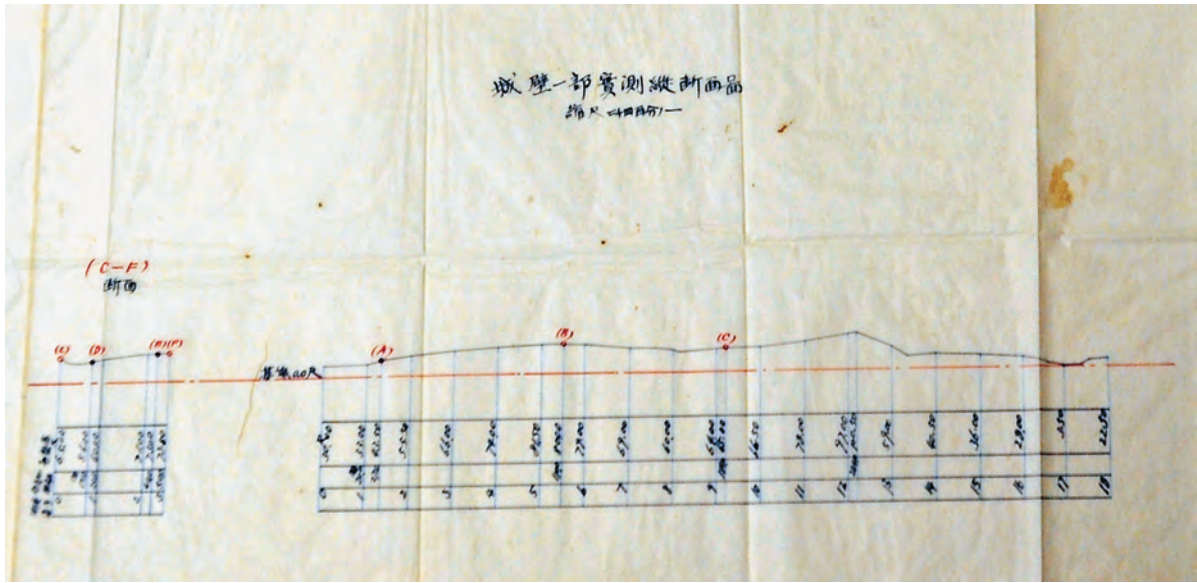


図14 達城 城壁一部実測断面図

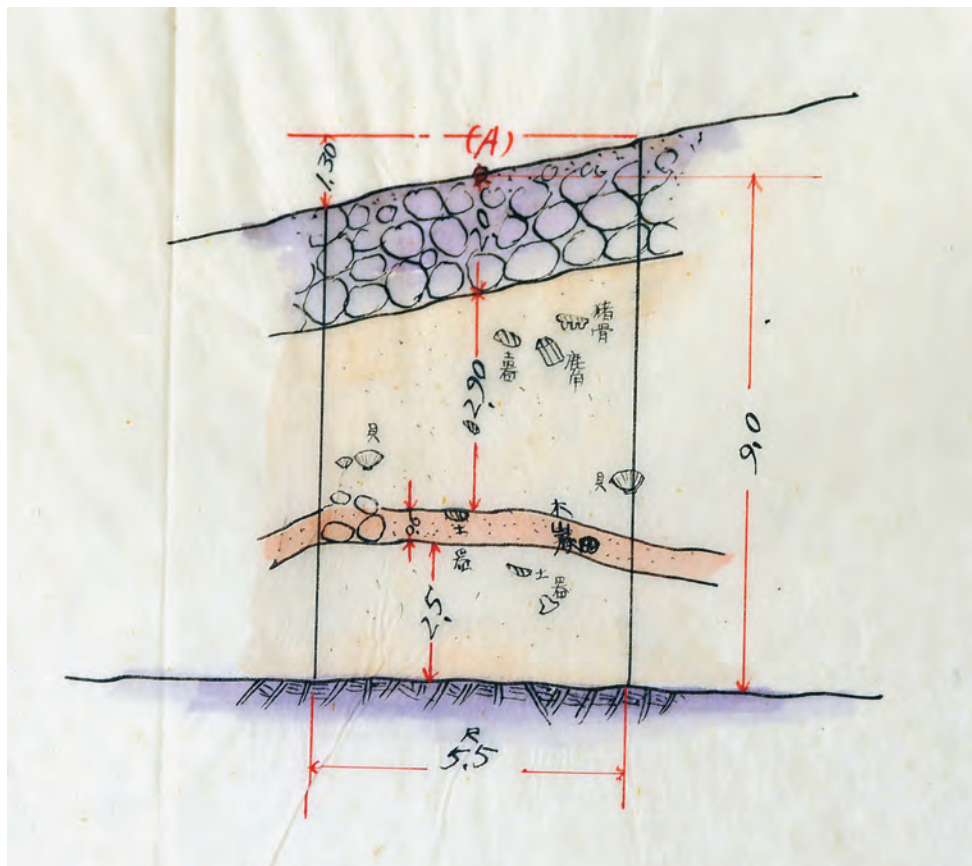


図15 達城 A調査区土層図



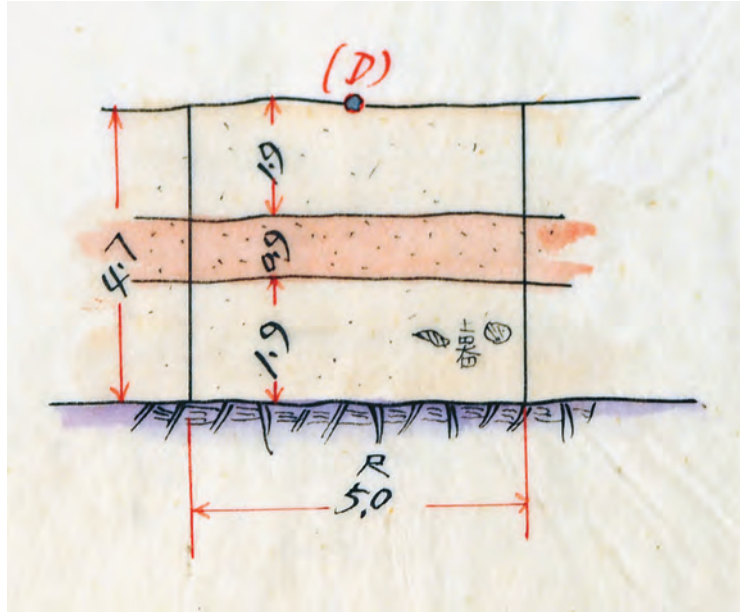


图16 達城 D調査区土層図

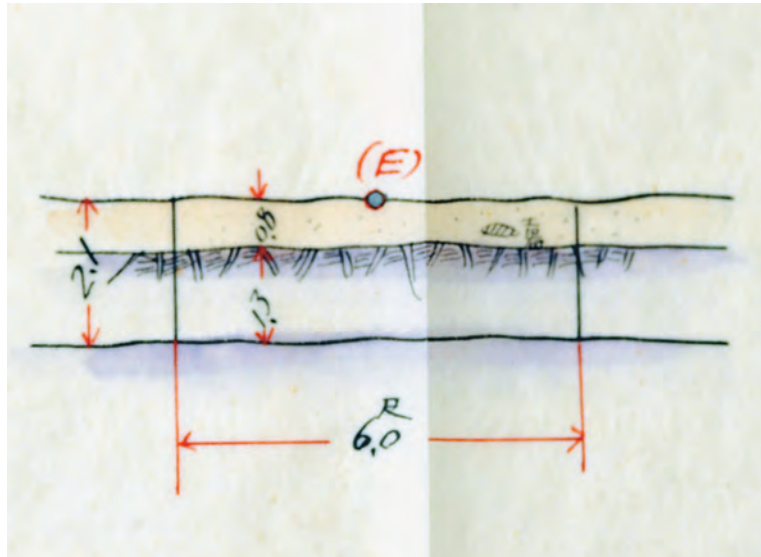


图17 達城 E調査区土層図

## 2) 慶尚北道慶州郡慶州面校里 半月城壁下発掘実測図 (図8)

薄い和紙(73cm×40cm)の中央に「実測平面図(縮尺300分の1)」, 左側に「横断面図(縮尺50分の1)」, 右側に「縦断面図(縮尺50分の1)」を配した図である。

「実測平面図」(図11)は, 南川と月城の南側を流れる用水路および城壁と, 調査区との関係を示している。本図により, 調査区の壁はほぼ東西南北を向き, 東壁が城壁の切り通しに接するように配置されたことがわかる。

「横断面図」(図9)は, 調査区東壁の土層図, およびその背後にある城壁の断面を描いている。城壁部分は, 礫混じりの層として表現されている。一方, 「縦断面図」(図10)は調査区の南壁断面を描いており, 図の向かって左側には城壁断面がほぼ垂直に表現されている。

縦横断面の土層は, 大きく分けて3層からなる。下層は砂層で, 横断面・縦断面共に, 「赤土器」との記入がある。下層と中層の間には, 間層が存在する。中層は, 下層にくらべて砂が少ない土層であったようである。縦断面中層の下側には「麦」, 上側には「ビジョウ」との記入がある。「麦」は, 鳥居が論文(鳥居 1924)で言及した, 炭化した「小麦の粒の一小群」に該当すると思われる。横断面図の上層と中層の境界部分には, 「貝」・「猪牙」との記入がある。これら3つの層のうち, 「上層」・「中層」・「下層」は, 有光による出土遺物の報告による上層・下層・最下層に対応すると考えられる。

## (3) 大邱達城の発掘調査と関連図面

大邱は, 慶尚北道の中核都市である。朝鮮王朝の邑城城壁は日本人居留民の手により撤去され, その北側にできた大邱駅を中心として市街地が発達していった。市街地の西側に位置する丘陵の北端部分を利用して築造された平面円形の土城が, 達城である。植民地時代, 城内には大邱神社が建立された。解放後も神社の建物は残っていたが, 1966年に撤去された。その後, 達城内には動物園がつけられ, 現在では大邱市民の憩いの場となっている。

国立中央博物館所蔵資料の検討から, 鳥居は1913年度と1917年度の2回にわたり, 達城の調査をおこなったと考えられる。鳥居龍蔵記念博物館に残る図面(図12)は, 1917年度調査時の調査にかかわるものである。

図は薄い和紙に描かれている。紙の右半に「達城近平面図」, 左上に「試掘箇所ニ於ケル断面図」, 左下に「城壁一部実測断面図」が配されている。

達城近平面図(図13)は縮尺6250分の1で, 「九厘六毛ヲ以テ十間トス」との注釈がつく。達城とその周辺の地形を表した平面図で, 大邱府と達城郡達西面との境界線が1点破線で表記されていることからみて, 既製の地形図を元に作成されたのではないかと考えられる。等高線と川は水色, 道路は茶色で描かれ, 達城の範囲は, その輪郭にそって茶色に薄く彩色して表現している。

注目すべきは, 城壁の断面および調査区間の関係を示すためにおこなわれた地形測量の測点が赤い丸で示され, 各点が赤線で結ばれている点である。測点は, 神社に向かう参道に接した「(0)」(黒字で表記)点からはじまり, 1ヶ所の測点を間において, 城壁東側の切り通しにあたる「(A)」(赤字で表記)点にいたる。(A)点の丸は中が黒く塗られている。(A)点から, 城壁上を南から北に向かつて3ヶ所の測点が表記され, 城壁に沿って西側に折れて最初の測点には「(5)」(黒字で表記), その次の測点には「(B)」(赤字で表記)という字が書かれている。(B)点から城壁に沿って東から西へ3ヶ所の測点が置かれる。その次は2つの測点が互いに接しており, 「(C)」(赤字で表記)という字が書かれている。ここから側線は2方向に分かれる。まず城内に向かつて北から南に5ヶ所の測点が示される。北から1番目と4番目の丸印は黒く塗られ, それぞれ「(D)」と「(E)」が何れも赤字で記される。そして5番目の丸印には「(F)」が赤字で記される。一方, 城壁から北西側に伸びる丘陵に沿って9ヶ所の測点が置かれている。そのうち, (C)点の次の点は「(10)」が黒字で記され, そこから5番目の点は「(15)」が黒字で記されている。

後述する断面図の表記からみて, 測点は, (0)点からはじまって, 東側城壁の切り通し→東側城壁→北側城壁→北側城外まで18ヶ所が選ばれ, (0)点から5・10・15番目の測点を, 黒字で示したこと



がわかる。また、城の内側には3ヶ所の測点が設定されたことがわかる。その後、赤字で表記されたAからFまで6ヶ所の測点が追加され、そのうち丸が黒く塗られたA・D・Eが、発掘調査地点を示している。

城壁一部実測断面図(図14)は、縮尺2400分の1で作成された城壁の断面図である。右側が、(0)地点から北側城壁外までの測点に沿った断面、左側が、(C)地点から南側に分岐した測点に沿った断面を示す。

興味深いのは、断面図を作成するために測点ごとに計測された数値が、断面図の下側に記録されていることである。すなわち、上から「測点番号」・「基点ヨリノ距離(単位:間)」・「地盤高(単位:尺)」が記入されている。このうち地盤高は、(0)点の地盤高を30尺として、各地点の高さが算出されている。

試掘箇所ニ於ケル断面図(図15~17)は、上述のA・D・E地点を発掘した際の土層断面図である。縮尺は約20分の1である。基盤層および城壁層は紫色に、それ以外の層は、濃淡の違う茶色系の色で塗り分けている。調査区の幅は、Aが5.5尺、Dが5.0尺、Eが6.0尺と表記されており、1辺1.5m強の方形調査区が設定されたと考えられる。

A(図15)は、東側城壁の切り通し部分に設定された調査区で、調査区中央において、地表から基盤層上面までが9.7尺をはかる。地表下には城壁をなす層があり、その下側の遺物包含層は、薄い間層を境として上下2層に分けられている。上層内には、「土器」・「貝」・「猪骨」・「鹿角」などの表記がある。間層には「土器」・「木炭」、下層には「土器」の表記がある。

D(図16)は、北側城壁からやや内側に入った地点に設定された調査区で、基盤層の上の堆積は4.7尺をはかり、間層をはさんで上下2つの層に分けられている。下層には「土器」の表記がある。

E(図17)は、Dからさらに城内に入った地点に設定された調査区である。発掘は地表から2.1尺の深さまでおこなわれたようであるが、遺物包含層は地表から0.8尺までで、「土器」の表記がある。

#### (4) 金海貝塚の発掘調査と関連図面

金海貝塚は、1907年に金海を踏査した今西龍が、その存在を日本の学界に紹介したことを契機として、柴田常恵・鳥居龍蔵・黒板勝美・濱田耕作・梅原末治・藤田亮策・小泉頭夫・榎本亀次郎らが、数度にわたって発掘調査をおこなった遺跡である。中でも1920年に発掘調査をおこなった濱田耕作と梅原末治が、報告書などを通して金海貝塚を「金石併用期」の代表的な遺跡として以来、その評価は現在に至るまで、韓国・日本の考古学界にさまざまな影響を与えてきた。

しかし、植民地時代における日本人研究者の発掘調査の実態は、意外に知られていない。1914年度および1917年度に鳥居龍蔵がおこなった金海貝塚の発掘調査に関しても、これまでは、鳥居自身による簡単な言及および写真によってしか知ることができなかった(鳥居 1922・1924)。鳥居龍蔵記念博物館で新たに見つかった、当時の調査に関わる図面類は、国立中央博物館が所蔵する復命書などと照合することにより、当時の調査状況を具体的に復元することができる重要な資料である。

鳥居龍蔵記念博物館に所蔵されている金海貝塚関連図面は、「貝塚及鳳凰台附近平面図」が画用紙に描かれている他は、いずれも薄い和紙に複数の図面が一緒に描かれている。また、同じ時期に踏査をおこなった金海地域の支石墓に関する図面も残されている。各図面の概要は以下の通りである。

##### 1) 貝塚及鳳凰台附近平面図(縮尺1200分の1)(図18)

画用紙(59.0cm×39.6cm)に、金海貝塚・鳳凰台とその周辺地形の平面を測量した図である。鳳凰台は10間間隔、貝塚周辺の地形は5間間隔の等高線で表現されている。測量図はまず鉛筆で描かれ、等高線は茶色で、それ以外の地形は黒色で仕上げられた。また、川や主要な道路は彩色されている。貝塚の部分には、1917年度の調査地区と、丘陵上にあった岩および板石、および貝塚縦横断面図の起点となったポイントが記入されている。



図18 金海貝塚 貝塚及鳳凰臺附近平面図

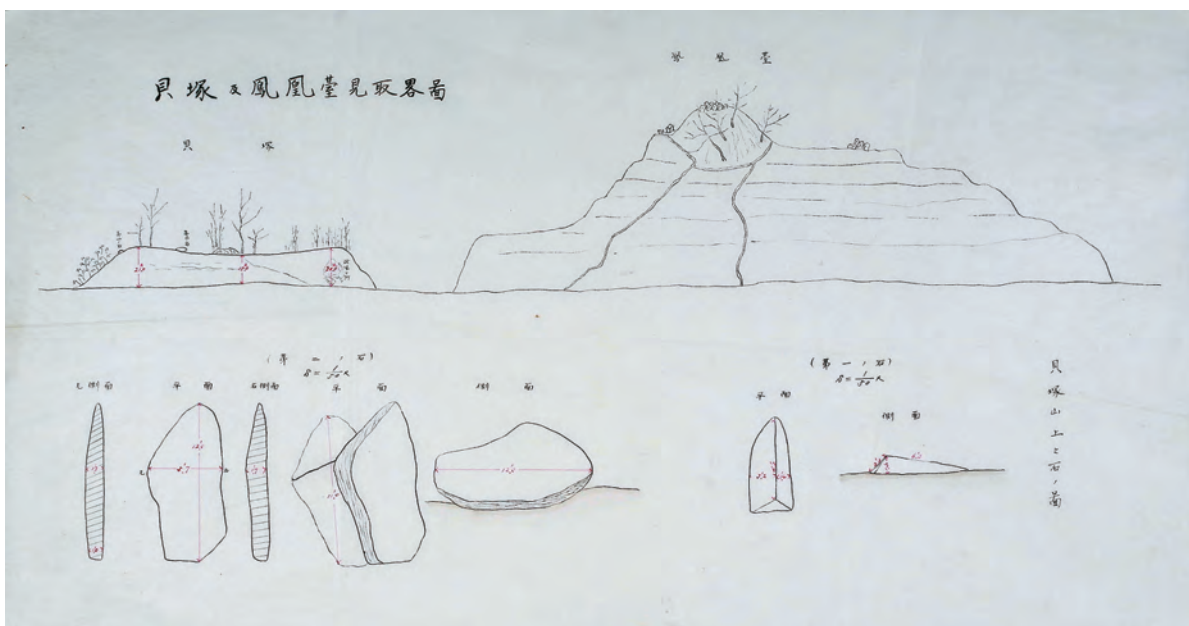


図19 金海貝塚 貝塚及鳳凰臺見取略図 貝塚山上之石ノ図



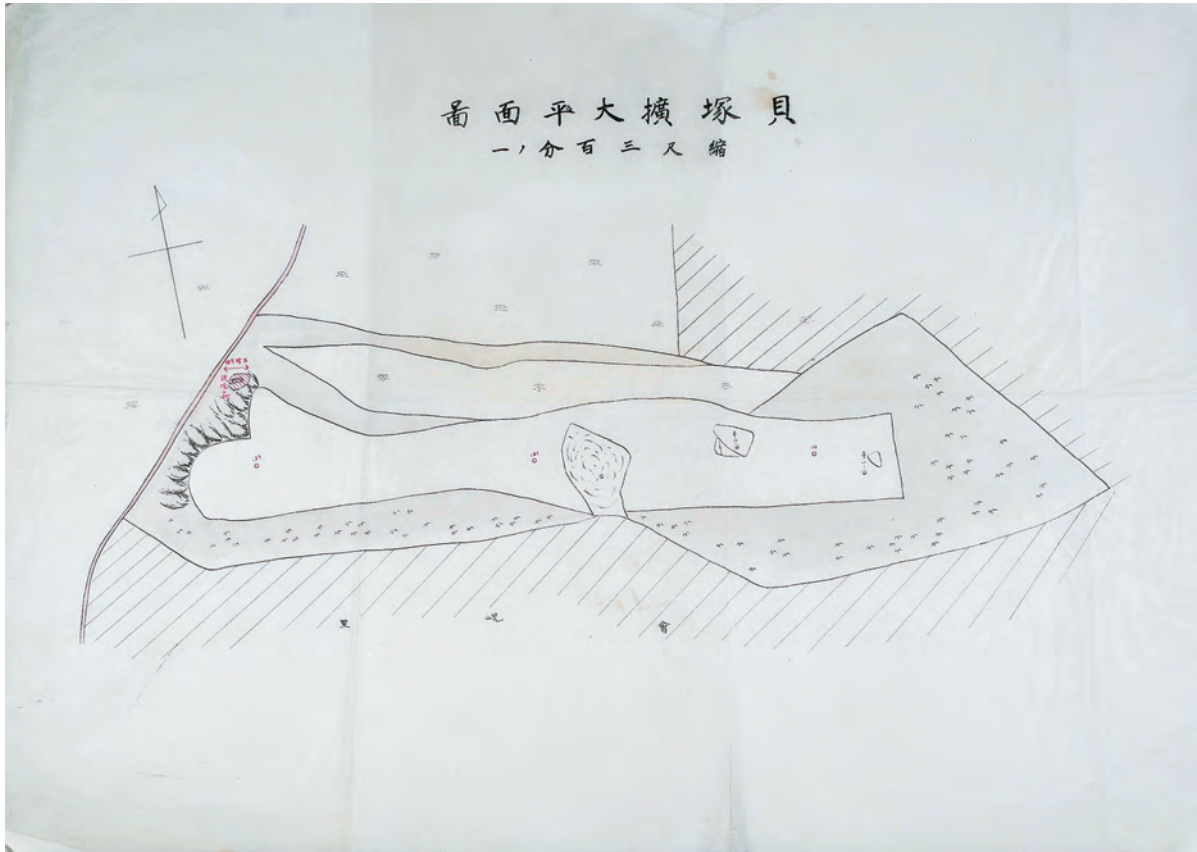


図20 金海貝塚 貝塚拡大平面図



図21 金海貝塚 貝塚横断面図・貝塚縦断面図・縦横断面図に於ける層の様

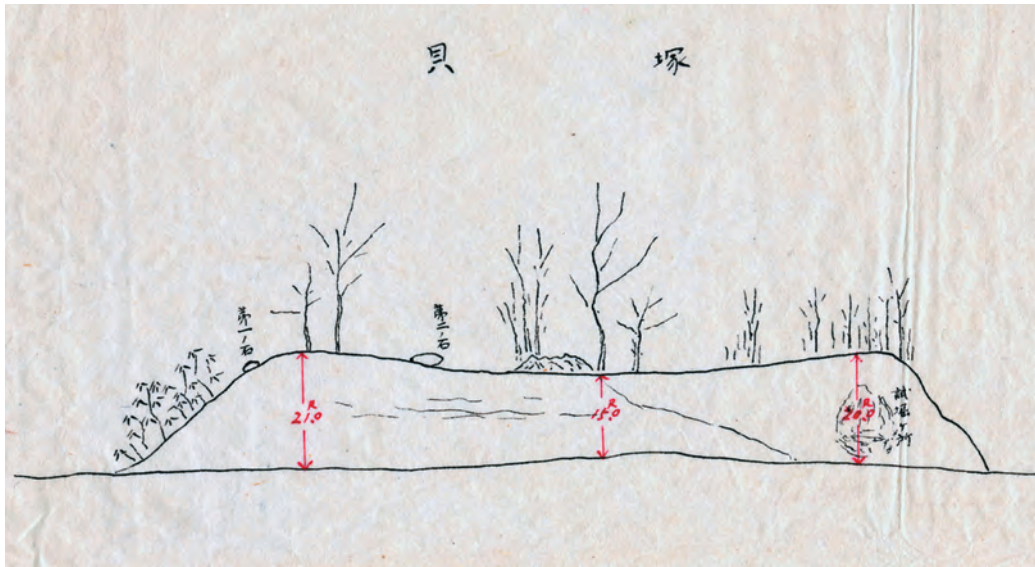


図22 金海貝塚 貝塚及鳳凰台見取略図（一部）

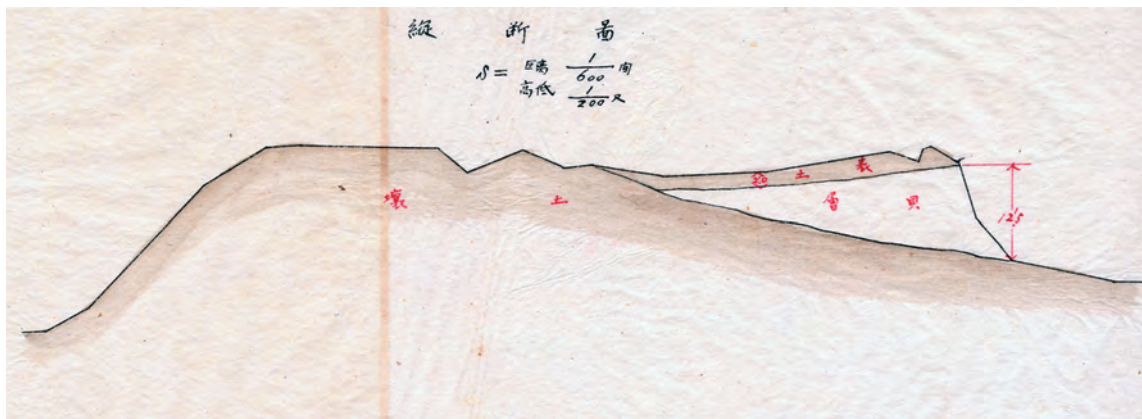


図23 金海貝塚 貝塚縦断面図（貝層）

測点	追加距離	地盤高
1-25	0.0	28.26
1-180	2.0	28.26
1-150	0.0	27.06
1-70	12.0	48.86
1-25	17.0	54.06
1	20.0	54.61
1-100	0.0	50.06
1-120	0.0	50.26
1-150	0.0	50.06
1-150	0.0	50.91
2	4.0	51.11
2-20	6.0	49.46
2-100	0.0	40.01
3	0.0	52.81
3-20	0.0	55.06
3-50	0.0	55.56
3-80	0.0	51.06
3-100	0.0	42.21
3-120	0.0	49.26
3-150	0.0	48.26
2-150	0.0	24.11
2-180	0.0	28.11

図24 金海貝塚 測点・追加距離・地盤高





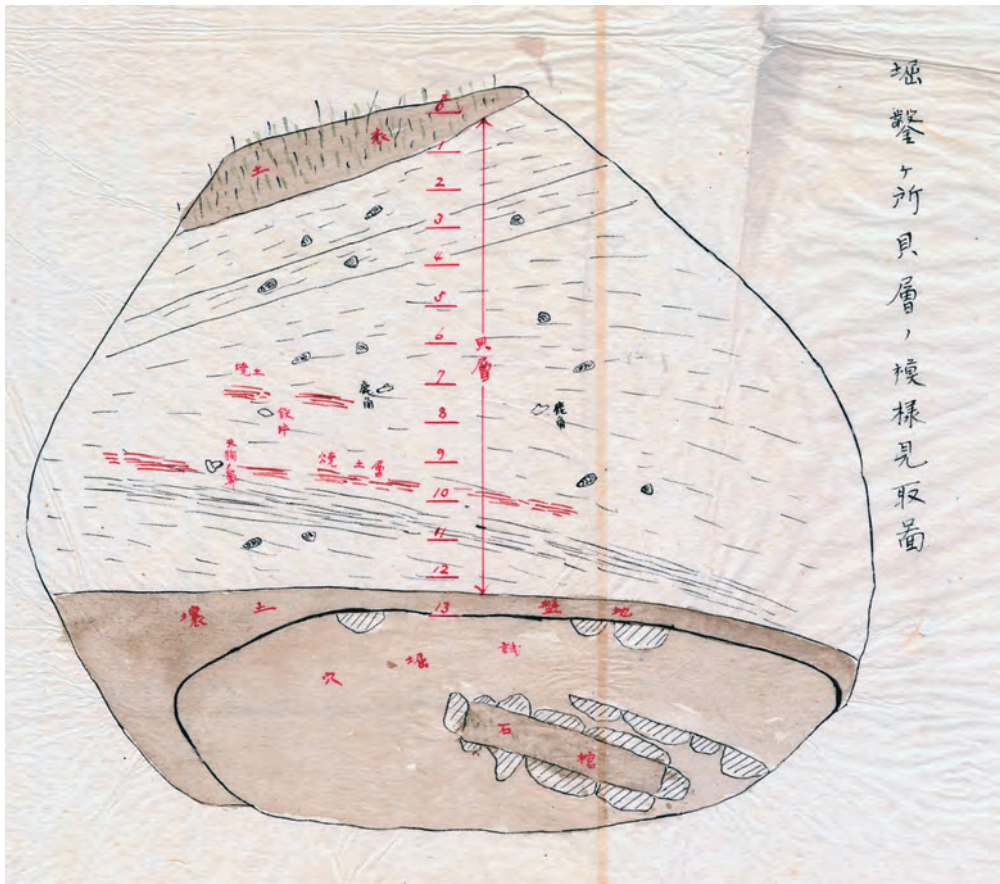


図28 金海貝塚 掘鑿ヶ所貝層ノ模様見取箇

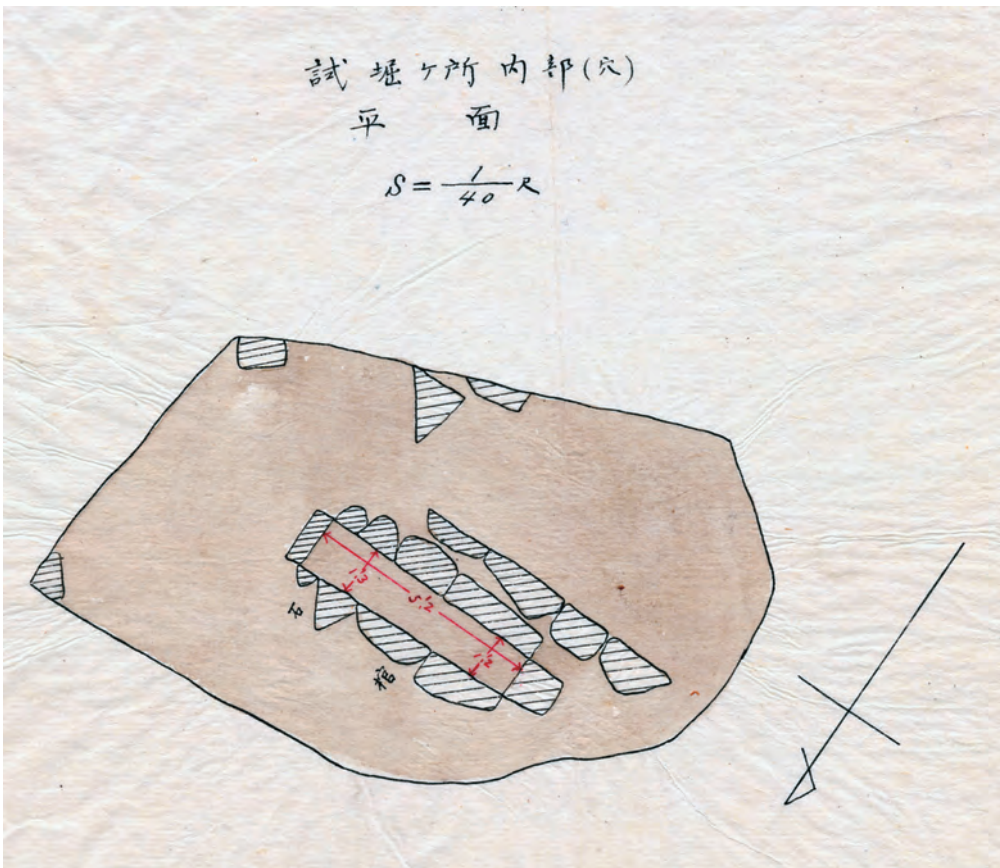


図29 金海貝塚 試掘ヶ所ノ内部(穴)平面



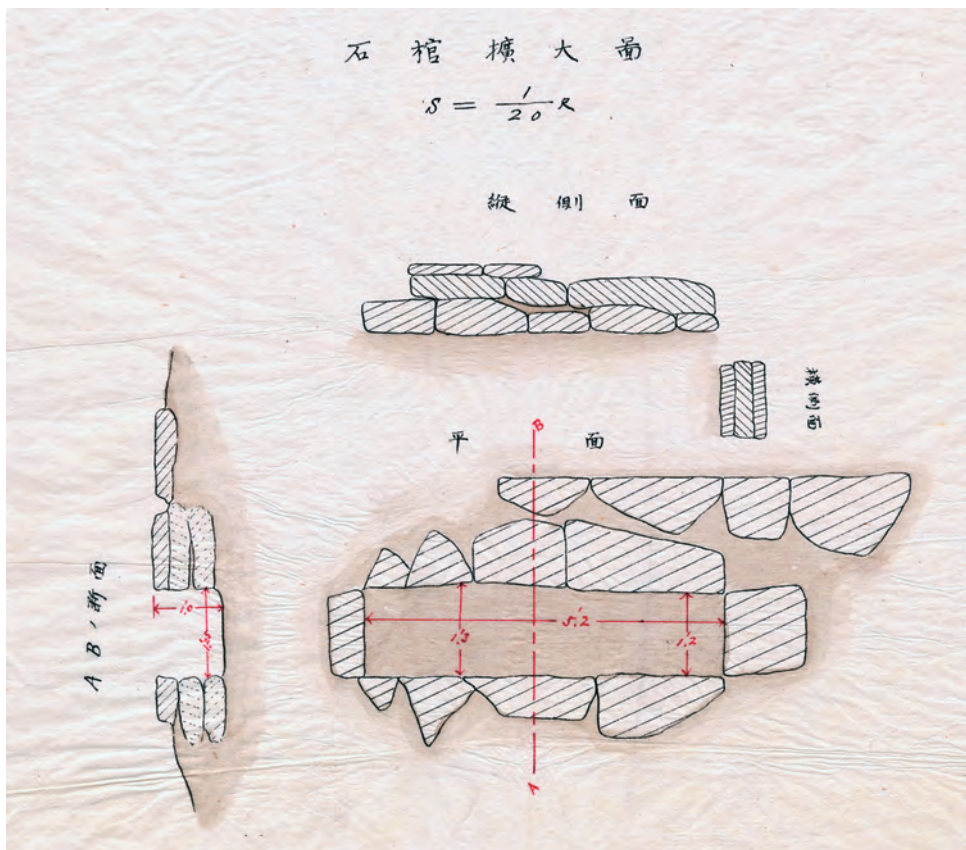


图30 金海貝塚 石棺拡大図

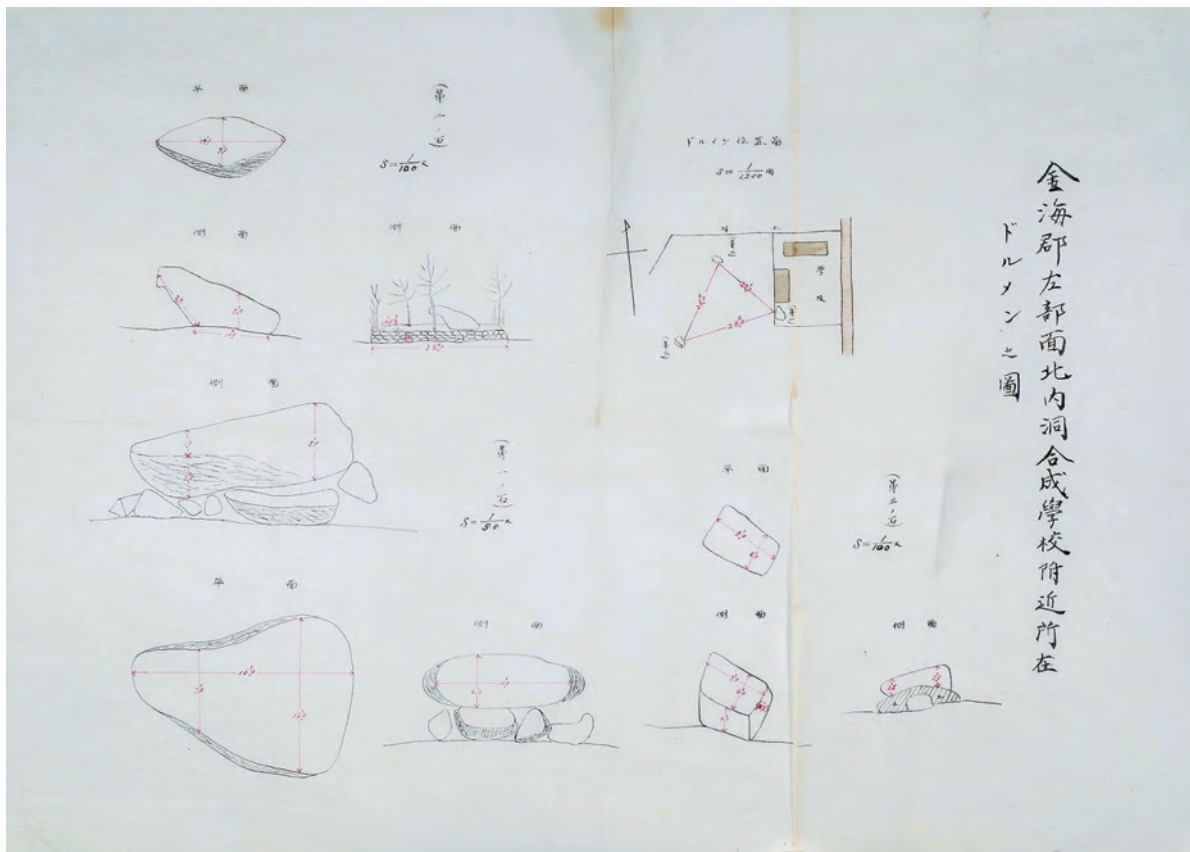


图31 金海郡左部面北内洞合成学校附近所在ドルメン之圖

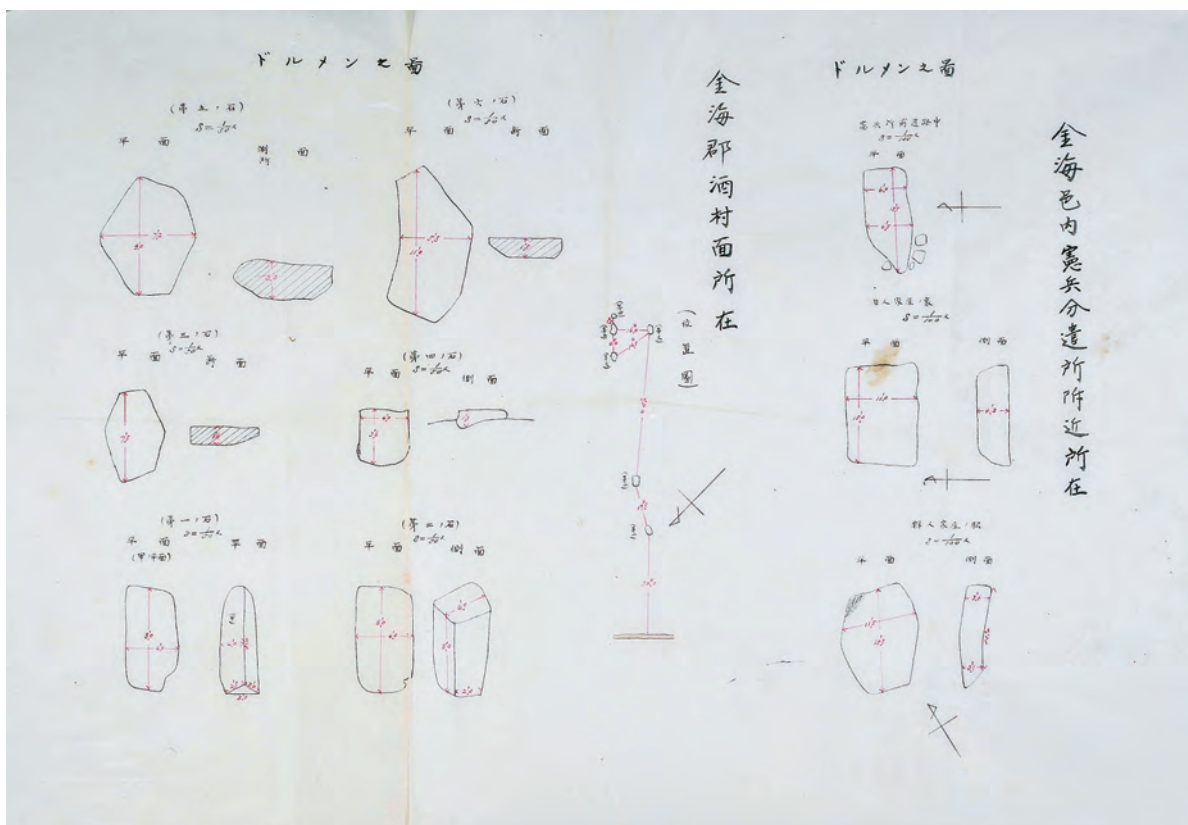


図32 全海邑内憲兵分遣所附近所在ドルメン之図・全海郡酒村面所在ドルメン之図

2) 貝塚及鳳凰台見取略図・貝塚山上之石ノ図 (図19)

薄い和紙 (55.0cm×30.0cm) の上半に「貝塚及鳳凰台見取図」、下半に「貝塚山上之石ノ図」が描かれている。「貝塚及鳳凰台見取図」は、貝塚および鳳凰台を北側からみた状況が描かれる。貝塚の所在する丘陵を表現した部分 (図22) には、貝塚上にある支石墓上石や調査区的位置が示されている。また、断面図を作成した部分の高さが、赤字で記入される。

「貝塚山上之石ノ図」は、全海貝塚の位置する丘陵上の2基の支石墓上石の平面および側面を描き、石の長さおよび幅が赤字で記入される。

3) 貝塚拡大平面図 (縮尺300分の1) (図20)

薄い和紙 (55.0cm×39.8cm) に描かれ、図1の貝塚が位置する丘陵部分を拡大した図であると思われる。等高線は描かれず、宅地部分は斜線で表現され、斜面部分には茶色の彩色がなされる。断面図の基準点は赤字で描かれ、調査区も赤い斜線で表現された。

4) 貝塚横断面図 (縮尺200分の1)・貝塚縦断面図 (縮尺高低200分の1, 距離600分の1)・縦横断面図に於ける層の様相 (図21)

薄い和紙 (57.8cm×39.2cm) の左半に、上から貝塚の立地する丘陵の西側・中央・東側 (図25) の横断面図、および丘陵の縦断面図を描く。その下側には、測点 (基準点1・2・3からの距離)・追加距離 (貝塚東端からの距離)・地盤高が記入されており (図24)、これらの数値をもとに、断面図が作成されたと考えられる。右半の「縦横断面図に於ける層の様相」では、上から貝塚の立地する丘陵の西側・中央・東側 (図26) の横断面図、および丘陵の縦断面図 (図23) の貝層以外の部分を茶色で彩色することで、貝層を表現している。

5) 掘鑿ケ所貝層ノ模様見取図・掘鑿穴縦横断面図・試掘ケ所ノ内部 (穴) 平面石棺拡大図 (図27)

薄い和紙 (58.0cm×39.0cm) に、貝塚の調査区に関する4種の図面が描かれている。

掘鑿ケ所貝層ノ模様見取図 (図28) は、調査区の貝層と、その下面でみつかった石棺の関係を示す図である。貝層には、大まかな堆積方向が記されている。また、貝殻を示す絵や、「焼土」・「鹿角」・



「鉄片」・「天狗ノ鼻（把手か?）」などの記述がある。また表土および貝層下層は、茶色で彩色されている。

掘鑿穴縦横断面図（縮尺100分の1）は、調査区内部の縦横断面図である。これらの断面図によって、鳥居が貝塚の北西隅斜面を垂直に掘削することにより、最低限の労力で貝層とその下層の様子を把握しようとしたことがわかる。

試掘ケ所ノ内部（穴）平面（縮尺40分の1）（図29）は、調査区床面でみつかった石棺の出土状況平面図である。地山部分は茶色で彩色されている。

石棺拡大図（縮尺20分の1）（図30）は、石棺の平面図・縦側面図・横側面図・横断面図を組み合わせたものである。石棺を設置する際に掘られた墓壇の存在は認識されていない。しかし、横断面図では、石棺の裏込めの状況が表現されている。

#### 6) 金海郡左部面北内洞合成学校付近所在ドルメン之図（図31）

薄い和紙（56.0cm×39.2cm）に、支石墓の配置図（縮尺1200分の1）と3基の支石墓（第一ノ石は50分の1、第二・三ノ石は100分の1）の平面図と側面図（2方向）を描く。合成学校は現在の合成初等学校にあたる。学校敷地内にある支石墓（現在は存在しない）を基準として、その北西側と南西側に位置する支石墓は、現在、首露王陵北側の公園内にある2基の支石墓に該当すると考えられる。

#### 7) 金海邑内憲兵分遣所附近所在ドルメン之図・金海郡酒村面所在ドルメン之図（図32）

薄い和紙（56.0cm×39.2cm）の右半に、金海邑内の憲兵分遣所附近にあった3基の支石墓を描いている。『金海府内地図』には、金海邑の北西側に複数の支石墓が存在したことが記録されており、現在も西上洞支石墓として残っている（大成洞古墳博物館 2004）。鳥居が記録したのは、これらの支石墓のうち3基であったと考えられる。

左半には、金海郡酒村面にあった6基の支石墓の配置図と、各支石墓の上石の形状が描かれる。鳥居の復命書によれば、酒村面望德里で調査をおこなったと記録されており、その時の調査結果を記録した図面であると判断される。

## 4 慶州月城・大邱達城・金海貝塚調査関連図面の学史的意義

今回紹介した鳥居龍蔵記念博物館に所蔵されている慶州月城・大邱達城・金海貝塚の調査に関連する図面は、鳥居龍蔵の1917年度朝鮮古蹟調査の実態と、鳥居の朝鮮先史時代に対する学説を知る上で、重要な意味をもつと考えられる。このうち、慶州月城・大邱達城の調査とその評価に関しては、今回翻訳・紹介した咸舜燮氏の論考（咸 2013）で、国立中央博物館所蔵資料を元にした検討がなされており、そうした成果との総合的研究が望まれる。また、同時期に鳥居龍蔵が日本や他地域でおこなった調査で残された図面類との比較も進める必要があるだろう。そうした研究に備えるべく、ここでは、これらの図面類が作成された経緯と、その学史的意義について基本的な考察をおこないたい。

### (1) 図面作成の経緯

まずこれらの図面が、どのように作成されたのかについて考えてみたい。このことを考える上で重要な資料が、鳥居龍蔵が朝鮮総督府に提出した復命書に添えられた、「大正六年度古蹟調査実測図目録（鳥居委員提出）」である。計16枚の図面名に、目録順にアルファベットを振って列挙すると以下の通りである。

- a 慶州半月城址平面実測図
- b 同 城壁下発掘個所平面図
- c 同 上 断面図
- d 大邱達城址平面実測図
- e 同 城壁一部断面図
- f 同 城壁下発掘個所断面図

- g 同 城址内発掘包含層断面図
- h 達城郡花園面川内洞撐石分布図
- i 同 月背面辰泉洞撐石分布図
- j 晋州城址平面実測図
- k 金海郡右部面会峴里鳳凰台貝塚平面実測図
- l 同 貝塚発掘箇所包含層断面図
- m 同 鳳凰台及貝塚断面図
- n 同 貝塚下部古墳平面図
- o 同 断面図
- p 酒村面望德里撐石分布図

咸舜燮氏からご教示によれば、これらの図面は国立中央博物館には現存しないという。そのため、具体的にどのような図面であったかを知ることはできない。ただ題目から推測して、鳥居龍藏記念博物館所蔵図面との対応関係をみると、以下の通りである。

#### 慶州月城

- 1) 半月城壁下実測図 a ?
- 2) 慶尚北道慶州郡慶州面校里 半月城壁下発掘実測図 b・c

#### 大邱達城

- 1) 達城附近平面図・試掘箇所ニ於ケル断面図・城壁一部実測断面図 d～g

#### 金海貝塚

- 1) 貝塚及鳳凰台附近平面図 k
- 2) 貝塚及び鳳凰台見取略図・貝塚山上之石ノ図 m ?
- 3) 貝塚拡大平面図
- 4) 貝塚横断面図・貝塚縦断面図・縦横断面図に於ける層の模様 l ?
- 5) 掘鑿ケ所貝層ノ模様見取図・掘鑿穴縦横断面図・試掘ケ所ノ内部(穴)平面・石棺拡大図 n・o
- 6) 金海郡左部面北内洞合成学校附近所在ドルメン之図
- 7) 金海邑内憲兵分遣所附近所在ドルメン之図・金海郡酒村面所在ドルメン之図 p

こうしてみると、鳥居龍藏記念博物館所蔵図面と、鳥居が朝鮮総督府に提出した調査実測図目録は、ほぼ一致している。また、ほとんどの図は、薄い和紙に描かれており、原図をトレースしたものと思われる。さらに、慶州月城の図2)、大邱達城の図1)、金海貝塚図5)・7)のように、復命書では別々の図面として目録が提出されている図面が、1枚の紙に描かれている例が確認できる。以上のような状況証拠からみて、鳥居龍藏記念博物館所蔵図面は、鳥居が手元に資料を残すために、朝鮮総督府に提出した図面をトレースしたものではないかと考えられる。

#### (2) 図面作成の方法について

次に、鳥居龍藏による図面作成技術についてみておきたい。今回紹介した図面は、鳥居龍藏が、遺跡周辺の地形を測量し、調査区の平面図・層位図・断面図・遺構図などを記録・作成するの必要性を知り、実践したことを示している。しかし、実際の製作方法には、違いが認められる。

まず平面図をみると、平板測量を用いた地形図を作成したか、または既存の地形図を利用したと思われるものがある。例えば大邱達城の平面図は、大邱府と達城郡の境界線が描かれていることなどからみて、既製の地形図のうち必要な部分をトレースして作成した可能性が高い。縮尺6250分の1の本



地図が、25000分の1地図を4倍、50000分の1地図を8倍したものであることも傍証となろう。

一方、慶州月城の平面図および金海貝塚・鳳凰台の平面図は、対象地域の地形を平板測量した地形図であると考えられる。前述のように、月城平面図の城壁部分には、城内のある地点を基準とした総体的な高さを基準として、10尺単位で等高線が引かれている。また、鳳凰台・金海貝塚の平面図は、鳳凰台側は10尺、金海貝塚周辺は5尺単位で等高線で引かれている。つまり、朝鮮総督府により作成されていた地形図のm単位の等高線とは、基本単位が異なるのである。

達城および金海貝塚における断面図作成においても、間・尺単位で現地での測量がおこなわれていたことが、断面図作成のために記録された基点からの距離や地盤高の記録によってわかる。地点間の距離の測定や、比高の測定をどのようにおこなったのかは不明である。しかし、調査対象の遺跡を記録するために尺貫法を用いて測量をおこなう技術をもった人が、図面作成に参加したことは確かである。

これに対して、月城の調査区周辺の平面図、金海貝塚調査区内でみつかった石棺墓の平面図・側面図、調査区内の土層図の表現は、模式図に近いものである。また、貝塚及鳳凰台見取略図や、支石墓上石の実測図は、真上・真横から対象物を投影した図であるものの、絵図に起源をもつ描写に通ずる伝統的な表現方法を用いている。

以上のように、慶州月城・大邱達城・金海貝塚の調査成果を図面として記録する方法としては、近代的な測量技術を駆使したものと、従来の手法を用いた略図に近いものが存在する。後者は、恐らく鳥居が自ら記録したものであると考えられる。それに対して、前者の記録を誰がおこなったかが問題となる。鳥居自身が測量しなかったとすれば、次の候補は調査に同行した澤俊一となろう。しかし、彼は写真技師であり、その履歴からみて彼が測量技術も身につけていた可能性は低い。となると、発掘調査時のみ、総督府博物館や他部局の測量技師が参加した可能性を考えなければならない。具体的に誰が測量を担当したのかについては、今後、さらに検討していきたい。

### (3) 鳥居龍蔵による調査の学史的意義の再検討

最後に指摘したいのは、今回紹介した図面によって、これまで不明であった鳥居龍蔵による1917年度調査の全容が明らかになった点である。鳥居は、濱田耕作と梅原末治が調査した1920年の発掘調査報告書に対する書評の中で、金海貝塚は、濱田らが考えた金石併用期の遺跡ではなく、三国時代よりさかのぼり、「石器時代（有史以前）」より新しい「金属器時代」の遺跡であると主張した（鳥居1924）。しかし、そうした主張の根拠は、鳥居による1917年度調査についての簡単な説明と、調査区の貝層および石棺の写真から推測するしかなかった。今回見つかった図面により、鳥居が発掘した調査区の具体的な状況を正しく知ることができるようになった。つまり鳥居は、この調査により、貝層を中心として、その上層と下層に別の文化層を確認したことが明らかになったのである。特に、貝層下層で発見された石棺墓が、石器時代のものであると判断したことは重要である。1920年調査区が再調査された時に同様の時期の土壙墓が発見されたこと（釜山大学校人文大学考古学科 2002）は、金海貝塚の層位に対する鳥居の理解が、基本的に妥当であったことを証明している。結果論ではあるが、金海貝塚に対する鳥居の理解は、現在の韓国考古学における時代区分に類似したものであったといえる。こうした鳥居の解釈については、今後、より積極的に再評価する必要があるだろう。また、月城や達城での調査成果については、有光教一による遺物の報告（有光 1959）や、咸舜燮氏による国立中央博物館所蔵資料による調査の分析（咸 2013）と総合することによって、その調査の全容が明らかにすることが可能であることを指摘しておきたい。

## おわりに

以上、鳥居龍蔵記念博物館に所蔵されている、鳥居龍蔵による慶尚北道・慶尚南道での調査に関連する資料を紹介し、その学史的意味を検討した。その結果をまとめることで、本稿をしめくくるとしたい。まず各種の地図類は、鳥居龍蔵の調査ルートを復元する上で、重要な資料であることを明らかにした。また、これらの地図自体が、1910年代前半において、日本人がどのような地図を作成・利用していたかを考える上での貴重な資料であると評価されよう。

次に、慶州達城・大邱月城・金海貝塚の発掘調査に関する図面は、これまでその実態が不明であった1917年度発掘調査の成果を復元する上で、大きな意味をもつことを明らかにした。そして、図面の分析を通して、鳥居龍蔵による朝鮮先史時代についての理解を、再評価できる可能性があることを知ることができた点は重要である。さらに、これらの図面は、当時の日本人研究者の図面作成技術の実態を明らかにするための資料として活用することもできることを指摘することができた。

今回の調査にあたり、鳥居龍蔵による慶尚北道・慶尚南道の調査に係る写真類も、鳥居龍蔵記念博物館に存在することをご教示いただいた。ただ、これらの写真を整理するためには、国立中央博物館に所蔵されているガラス原板、およびそれに関する記述との比較対象が必要であろう。また、他にも関連資料が残されていないのかが気になるところである。そうした資料の探索をはじめとして、今後とも、鳥居龍蔵記念博物館に所蔵されている、鳥居龍蔵の朝鮮古蹟調査関連資料の検討・公開作業が進められることを期待しつつ、本稿を終えることとしたい。

## 註

- (1) 植民地時代の朝鮮古蹟調査事業に関連する書類については、従来その目録だけが公開されていた。しかし、最近、国立中央博物館で、ホームページ上で原文の公開をはじめており、容易にその内容を閲覧・検討することが可能となった。本資料の存在と学史的意味については、咸舜燮氏からご教示を得た。

## 参考文献

(韓国語)

- 姜仁求 1987 『韓国の前方後円墳 舞妓山と長鼓山測量調査報告書』韓国精神文化研究院  
 国立慶州文化財研究所編 2010 『慶州月城 基礎学術調査報告書』  
 国立大邱博物館 2014 『大邱達城遺跡Ⅰ－達城調査報告書』  
 国立中央博物館 1997 『ガラス乾板目録集Ⅰ－小判1909年～1930年－』  
 国立中央博物館 2009 『韓国博物館100年史』資料編  
 大邱文化芸術会館 2007 『達城 忘れられた遺跡の再発見』  
 大成洞古墳博物館 2004 『加耶誕生の序幕 金海の支石墓』  
 吉井秀夫 2014 「日本所在金海貝塚関連資料について」『金海会峴里貝塚』  
 咸舜燮 2013 「日帝強占期鳥居龍蔵の慶州月城及び大邱達城調査について」『日帝強占期嶺南地域での古蹟調査』, 学研文化社

(日本語)

- 有光教一 1959 「慶州月城・大邱達城の城壁下の遺跡について」『朝鮮学報』第14輯, pp.489-502  
 石尾和仁 2010 「鳥居龍蔵の朝鮮半島調査実施時期をめぐって」『考古学研究』第57巻第3号  
 柏書房 1985 『朝鮮総督府作成 1万分の1朝鮮地形図集成』  
 朝鮮総督府 1916 『朝鮮古蹟図譜』三  
 朝鮮総督府 1920 「大正六年度古蹟調査事務概要」『大正六年度古蹟調査報告』



- 鳥居龍蔵 1924 「濱田・梅原両氏著『金海貝塚報告』を読む」『人類學雜誌』39-1
- 鳥居龍蔵 1925 『有史以前の日本』
- 鳥居龍蔵 1953 『ある老学徒の手記』
- 吉井秀夫 2008 「澤俊一とその業績について」『高麗美術館研究紀要』第6号, pp.77-89, 高麗美術館  
研究所